OLIVEPRESS

オリーブジャパンニュースレター

VOL.2

発行／オリーブプレス編集部

オリーブジャパン国際開発協力協会

目 次

◆ はじめに 1
◆ イタリアの NGO ISI が法人化 2
◆ メキシコ ICTE からの報告 4
◆ オリーブジャパン海外支援プロジェクト 5
◆ 活動報告 from エルサルヴァドル 7
◆ 出会いから始まる国際協力 9
◆ 講座紹介 11
◆ 講座案内 12
◆ 緊急報告 SOS 中米 13
◆ お知らせ・会計報告 14

はじめに

アンジェラ ヴォルペ
Angela Volpe

この『オリーブプレス 2』の誕生まで 3 年間かかりました。 オリーブジャパンを支えてくださる方々にお詫びを申し上げます。

やはりＮＧＯ活動は大変です。もっと多くの事を書いて皆さんに情報をお伝えしたいのですが、スタッフの私達は忙しすぎて時々食事をとる時間もなくなります。 どうぞご理解ください。

さて、ここで少しでもオリーブジャパンの活動について、やっと皆さんに報告が出来る事を大変嬉しく思います。

私は名古屋聖霊短期大学の「国際文化学科」の講師として勤めるために、1990 年 2 月に来日しました。イタリアでは、30 年間ＮＧＯとボランティア活動で活発に働く友人と一緒に、私も色々参加していましたが、日本でも“何かできれば良い”と思っていました。しかし、何から始めれば良いかよく分かりませんでした。

そんな時、メキシコにいるジョヴァンニ・リヴァ先生から電話がありました。

「あなたは教師でしょう。この世に、飢えて仕事がなく、学校に行けず、着る物がなく、家もない人がたくさんいることを、自分の学生に伝えてください。人間は人間らしく生きるために、他人に関心を持つのです。」

早速私は、このような事を学生たちに伝え始めました。これはお涙ちょうだい、又は感傷的で偽善的な慈善の業の話ではありませんでした。

私はジョヴァンニ先生から教えてもらった大切な真実だけを伝えました。 人間はみんな同じ人類に属しています。互いに助け合い、分かち合う事はボランティアの仕事ではなく、人間の仕事です。

そこでその話に耳を傾けてくれた若者たちもいました。彼らたちと一緒に、まず一番素朴な活動を始めました。チャリティーバザー・発展途上国についての展覧会と講演会でした。

その目的は三つです。第一は、発展途上国、特にエルサルヴァドル，ベネズエラ，ホンデュラスやメキシコでジョヴァンニ先生たちが始めた援助活動を、人材と資金によって日本から協力する事です。そして第二は、発展途上国に関する正しい情報を伝えることです。しかしもっとも大事な第三の目的は、この競争・学歴・お金そして権力を求めている社会の中で「連帯のオアシス」を作る事です。そのオアシスをジョヴァンニ先生は「コンパニア」と呼びます。それはラテン語から生まれた言葉で「同じパンを食べる仲間たち」を意味します。

私たちスタッフはよく話し合い、助け合い、仲間として一緒に働いています。問題が起きた時、誰のせいなのかは探しません。人間は皆間違いを犯しますが、起こった問題に対して、一緒に直面すればまた頑張れます。そして、同じ理想に向って働きます。その理想とは自己中心的に生きることではなく、他人を神からいただいた大事な贈り物として扱う事です。

このような小さなグループが徐々に世界的に社会の中に広がっていけば、大きな問題でも少しずつ解決できるようになると思います。社会の中で、ＮＧＯは健康な細胞のグループのようなものになる役目があると思います。病巣の周りに元気な細胞がたくさん集まれば、その影響によって病気は治ります。

イタリアのNGO　ISIが法人化

ISI(I Sant' Innocenti :児童を守る会)とはイタリアの NGO 団体で、オリーブジャパンの仲間です。オリーブジャパンの設立メンバーは ISI の友人で、同じ目的を持って活動しています。そして、オリーブジャパンと同じような形で働いています。ISI とは「ヘロデ王に虐殺された聖なる無実な子どもたち」という意味で、聖書のルカによる福音第1章から引用された言葉です。ですから、無実な子どもたちを助けるという精神で活動しています。このたび ISI は、イタリア政府から法人として認められることになりました。ここで ISI とその活動内容について、ご紹介したいと思います。

ISI はイタリア国内だけでなく、世界中で働いています。エルサルヴァドル、フィリピン、グァテマラ、ホンデュラス、メキシコ、ベネズェラなどです。一番力を入れているのは発展途上国の子どもたちに対して里親制度を実施し、1人につき年間 6 万円の援助をしています。その 6 万円で、発展途上国の子どもたちは自国で勉強でき、食事をし、衣服も用意することができます。つまり、人間らしく育てられるチャンスが与えられます。

そのほかに奨学金制度も実施しています。発展途上の国々では、勉学意欲があってもお金がないために勉強ができない子どもたちがたくさんいます。何人かの子どもたちに毎年 10 万円ずつの奨学金を贈っていますが、この奨学金制度は会員の方からの援助金で実施されています。

ISI がエルサルヴァドルで実現したいのは、「子どもの町」というプロジェクトです。「子どもの町」とは、親がいない子どもたちのための村をつくることです。そこは住居、職業訓練所、学校、図書館、教会、映画館、スポーツをする場などがある村です。いつ実現

できるかは未定ですが、現在そのために必要な資金を集めています。

同時に ISI、オリーブジャパン、エルサルヴァドルの FUNDIPRO（見捨てられた児童のための援助協会）は、親のいない子どもや若者がボランティアと一緒に住む二つの家を援助しています。この家はとても大切です。なぜなら、子どもは親がいなくなったり捨てられたりすると、路上生活をするようになり、これはとても危険なことだからです。そのようなことがないように ISI、オリーブジャパン、FUNDIPRO は、普通の家をつくり、面倒を見るボランティアの若者（現在イタリア人、日本人が一緒に住んでいます）と孤児が一緒に家庭的な日常生活を送っています。このような生活をすることで、子どもたちは普通の生活に戻ることができます。

ホンデュラスは、今大型ハリケーンの被害を受けて緊急状態です。その為、ISI は資金とボランティアを集め、現地に送っています。それ以前から、ISI は現地の NGO と共に未婚の母のためのセンターを援助しています。そこでは、職業訓練や幼稚園、医療サービスを受けることができます。

フィリピンでは ISI、オリーブジャパンが協力し、イタリア人のボランティアグループを支援し、女性を受け入れる職業センターのプロジェクトに参加しました。

メキシコでは、未婚の母、ストリートチルドレンのために働いている ICTE という技術専科協会（オリーブジャパンも参加）の支援に、力を入れています。

イタリアでは昨年 9 月に大地震があり、アッシジ近郊の二つの村は、完全に崩壊してしまいました。ISI は早速、カセノーヴェ、フォリーニョという場所に援助しに行き、オリーブジャパンからはスタッフの丸田美香が参加しました。そのプロジェクトは、子どもたちを預かる場所をつくることでした。大人は将来のことを考えたり、崩壊した家の修理に手がかかるので、子どもたちは居場所がありません。そこで ISI のスタッフは、子どもたちと一緒に遊んだり、勉強したりして、子どもたちの心の傷をいやすことに努めました。

これらの仕事がイタリア政府から認められ、1999 年に ISI は法人となりました。日本では NGO の法人化は難しいことです。イタリア政府は自由に活動を認めているので、法人であっても自由に働くことができます。自由に働けることはとても大切です。なぜなら、NGO にとって市民レベルで自由に働くということが、根本だからです。もちろんそのためには、政府の理解と助けが必要です。

ISI の会長はマルツィア・フランチェスキーニです。ISI は 20 年前からイタリアで活躍し、特に女性、子ども、若者たちを援助しています。国内で活動をしますが、同時に発展途上国の弱い立場の人のために働く精神を持っています。それはどんな国・宗教・民族でもかまいません。差別がなく、いろいろな出会いの中で働くグループを支える精神を持っています。例えるなら ISI の憲法にあたる資料から、この言葉を紹介します。

「この世の中で貧困と争いの問題を解決するには人々がお互いに助け合うべきです。連帯は特に大切です。連帯とは、この偉大な人類に属している意識を持つこと、そしてどんな人に会っても、その人は人類に属しているもので、人類に必要なものとして扱うことです。私たちは他人とコンパニアになりたいのです。人間は本物の友情から勇気をいただき、前向きになることができます。私たちは衣類・食べ物・薬・勉強のチャンスを与えたいだけではありません。一番与えたいのは、自分の尊厳を発見できるチャンスです。」

ISI (I Sant' Innocenti)　住所／Tel／Fax
Via dell'Abate,12
42100 Reggio Emilia-Italia
Tel　+39 0522 430567
Fax　+39 0522 331439

メキシコ ICTEからの報告

オリーブジャパンは、メキシコにあるICTE(Instituto Cientifico Tecnico Educativo:技術専科協会)を援助しています。ICTE の主な活動内容は、若者が専門的な技術を学べる技術専門短期大学の運営、教育者育成のための講座、就学困難な学生のための奨学金制度の実施、ストリートチルドレンの援助です。ICTE は、オリーブジャパン、イタリアの NGO 団体 ISI(児童を守る会)、エルサルヴァドルの FUNDIPRO(見捨てられた児童のための援助協会)と関連している人々から生まれた学校で、これらの団体と同じ精神を持っています。そして、メキシコで苦しんでいる人たちのためにも働いています。今回、私たちオリーブジャパンがICTE を通して支援しているチチャチョーマ(Chichanchoma)神父さまを紹介したいと思います。

チチャチョーマ神父さまの本名は、アレハンドロ・ガルシア・デュラン(Alejandro Garcia Duran)です。なぜ彼がチチャチョーマ神父さまと呼ばれているかというと、神父さまの外見からです。神父さまは長いひげを持っているのですが、頭はすっかり禿げています。だからチチャチョーマ、日本語で言うと「おハゲさん」という愛称で呼ばれているのです。

彼はスペイン人で、スペイン・バルセロナ県で生まれました。28 年前、彼は自分の修道会から派遣されて、メキシコのプエブラに行きました。彼がそこで見たものは、何百人もの子どもたちが道端に捨てられた光景でした。そこで彼は、その子どもたちのために働きたいと決意したのです。

そこで彼はスペインの修道会の院長の許可をもらい、メキシコで働くようになりました。彼がまずしたことは、子どもたちの気持ちを理解するため、また自分を受け入れてもらうために、3 ヶ月間子どもたちと同じように道で生活することでした。彼らと同じように食事をし、風呂にも入らず、道で寝たりしました。そうしているうちに、子どもたちは神父さまを受け入れるようになりました。

チチャチョーマ神父さまは現在 63 歳ですが、メキシコでこのように苦しんでいる子どもたちのために現在も活動しています。彼は 25 件の家をつくり、そこには 310 人の見捨てられた子どもたちが生活しています。各家ごとに小さなグループをつくって共同生活をし、神父さまが選んだボランティアたちがその面倒を見ています。彼の愛によってたくさんの子どもたちが人間らしい生活を送るようになっています。これらの家で育ち、教育されて、成長してから結婚して立派な家庭を作り、働いている人たちがたくさんいます。

神父さまは ISI から 10 月に招待され、イタリアのレッジョエミリア市で講演会を行いました。彼の話の中でもっとも印象深かったのは、路上生活する子どもたちと麻薬の話でした。

子どもたちの中には生活の苦しみから、麻薬に手を出す者もいます。メキシコでは麻薬が安いので、子どもたちにも簡単に入手できます。麻薬は使い始めるとその量が増えていき、脳にダメージを受けて元の生活に戻れなくなります。神父さまは、助けた子どもが再び逃げ出し、また麻薬に手を染めることを知っています。彼はある時、ある男の子を探しに行き、その子を見つけた時、こう言いました。

「あなたは、私のことを愛していますか?」

「はい。愛しています。」

「なぜ、私を苦しめているの?」

「僕は苦しめていないよ。」

すると、神父さまはタバコの火を自分の手に押しつけました。男の子はそれを見て大変驚きました。

「あなたが麻薬を使うとき、私の心をこのようにしているのだよ。だから、やめなさい。」

と神父さまは言いました。

現在、その男の子は神父さまの協力者です。

オリーブジャパン海外支援プロジェクト

～エルサルヴァドル現地レポート～

オリーブジャパンは、発展途上国への国際協力、特に教育支援に力を注いでいます。エルサルヴァドルの「見捨てられた児童のための援助協会（FUNDIPRO）」「エルサルヴァドル奉仕協会（FUPROBESA）」と協力して、貧困に苦しむ児童と若者への教育支援活動を行っており、日本からも何人かのスタッフが現地のＮＧＯと協力しながら働いています。

今回は、日本人ボランティアとして1997年2月から10ヶ月活動し帰国した、スタッフの大橋幸恵さんのリポートを、紹介します。

10ヶ月間に私が学んだこと

オリーブジャパンスタッフ
大橋　幸恵

私は5年前の名古屋聖霊短期大学の学生時代に、授業でヴォルペ先生と出会いました。当時先生とは面識がある程度でしたが実際に先生と話すきっかけとなったのは、ヴォルペ先生の教え子であり、その頃教務助手として働いていた吉見ひかるさんとの出会いでした。（彼女は1995年7月から現在もエルサルヴァドルで支援活動をしています。）

ヴォルペ先生や吉見さんと出会い、オリーブジャパンの活動に何か心に沸き立つものを感じました。

今回、日本人ボランティアとして私がエルサルヴァドルに行こうと思ったのは、自分がエルサルヴァドルの子どもたちや、貧困を何とかしたいという慈悲の気持ちからではありませんでした。

初めは〝学生時代に学んだスペイン語をもっと自分のモノにしたい〟という気持ちと、〝友だちの吉見さんがいるエルサルヴァドルに行ってみたい〟という気持ちから、ボランティアとして参加することを決めました。

ご存知の方もいると思いますが、エルサルヴァドルは、十数年に及ぶ内戦を経験した国です。5年前に終結した戦争の痕跡は、今でもストリートチルドレンや多くの貧困層の置かれた状況から見ることができます。

エルサルヴァドルではＦＵＮＤＩＰＲＯとＦＵＰＲＯＢＥＳＡが、貧しい人たちのために、自立支援・保健医療事業・教育支援に取り組んでいます。私は彼らたちと一緒に、おもに現地の子どもたちとスポーツをしたり、工作の授業をしたり、日本でいう「保健」について教えました。

なぜそのようなことを、わざわざ子どもたちとしたり教えたりしなければならないのでしょうか。日本ではそのような施設はまず、必要あ

りません。日本ではほとんど全ての子どもが保育園・幼稚園・小学校・中学校に通い、人間として必要なことを学びます。しかしエルサルヴァドルの街角にあふれている子どもたちは社会から見放された存在であり、麻薬や窃盗などの犯罪で大人に利用されています。

FUNDIPRO（ファンディプロ）では、彼らの信頼を得るために単に物を与えるだけでなく、一緒に学んだり遊んだりするなかで、時間をかけて人間同士のつながりを築こうと努めています。先ほど「保健」について教えると書きましたが、例えば外から帰ったら手を洗うこと、食べた後には歯を磨くことなども教えました。日本では親が教えるようなことも、エルサルヴァドルでは、私たちのようなボランティアが教えなくてはいけないという現状です。なぜなら彼らの親でさえ、そのようなことを自分の親から教えられずに育ち、また寸暇をおしんで働かなければならず、あるいは仕事が無いため子どもを教育する気力さえないからです。

FUPROBESA（フープロベーサ）では若い女性を対象に縫製技術指導講座を開いています。それは夫がいないあるいは失業している女性が少しでも経済的に自立できるよう、縫製工場などで必要とされる洋裁の技術指導を行うものです。そこでの私たちボランティアの役割は子どもたちと勉強したり遊んだりすることでした。私たちスタッフの中にはイタリアから来たボランティアの女性や、エルサルヴァドルの若者たちがいました。彼らとは週に何度か集まり、自分の役割や社会でぶつかる問題や自分自身について語り合いました。こういった機会は日本での活動の時にも設けていますが、人として成長する上で重要な価値を持っています。また同時に友情の喜びを強く感じる時間です。

初めはスペイン語習得が目的であったエルサルヴァドルでしたが、人と人が出会い友情や思いやりを分かち合うことで、これほどにも大きな安らぎと幸福感を得られるということを知ることができたこの 10 ヶ月は、私にとって新たな気持ちで人生を歩むための大切な時間となりました。このことを一人でも多くの人に知ってもらいたいと思います。

《プロフィール》

名古屋聖霊短期大学を卒業した約一年後にエルサルヴァドルへ行く。
帰国後は発展途上国の人びとに技術を伝えるために、農業・酪農の仕事を実際にしながら、勉強中。

エルサルヴァドル：中米太平洋側に位置する小さい国で、国名は“救世主”を意味する。首都は“聖なる救世主”を意味するサン・サルヴァドルで、国土の大部分が高原のとても自然が美しい所である。大学もあるが、学校教育はまだまだ不十分で文盲率も低くはない。この国での死因のうち、最大のものはビタミン欠乏症といわれるが、人口に比べ病院は非常に少なく収容能力も少ない。

FUPROBESA

Fundación Pro Beneficencia Salvadoreña

活動報告

from　エルサルヴァドル

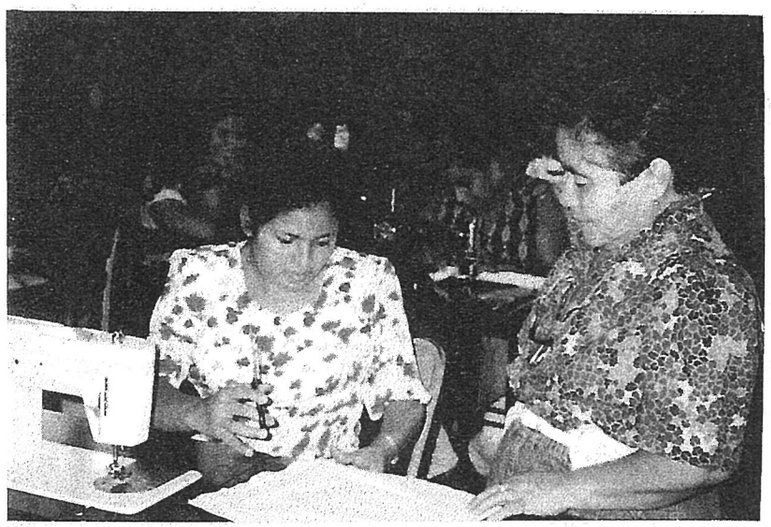
サンタテクラ保育園　Las Abejitas

FUNDIPRO・FUPROBESA で働く現地ボランティアとミシン講座に通う母親の子供

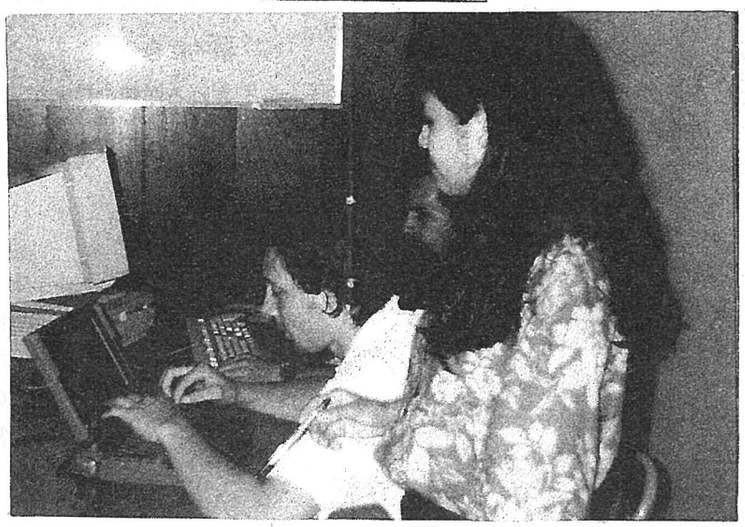
若者達によるバザー

保育園での工作の時間

サンタテクラで行われている裁縫講座



コンピューター講座



CURSO DE VERANO　夏期学校の修了式

出会いから始まる国際協力

インタビュー

イタリアンカフェ　FOLON（フォロン）
柴田　淑美（しばた　よしみ）さん

FOLON（フォロン）は、名古屋市天白区植田にあるイタリアンカフェです。オリーブジャパンと深く関係のあるFOLONについて、オーナーの柴田淑美さんに、編集部がお話をうかがいました。

◇FOLONを開いたきっかけは何ですか？またオリーブジャパンとはどのような関わりがあるのでしょうか。

オリーブジャパンを通して生まれた友情を深める場所、つまり皆が集まることができ、誰かに会うことのできる場所がほしかったからです。オリーブジャパンは勉強会や文化講座、バザー等いろいろな活動をしていますが、それ以外での交流の場所がつくれないかと考え、FOLONが生まれました。

ご存知のように、オリーブジャパンは貧困に苦しむ若者たちの教育支援事業をしています。そしてこのオリーブジャパンの活動を支えている力は友情です。ボランティア活動のためだけの集まりではありません。この友情は「他人に関心を持つ」意識を生みます。この友情から生まれた結果の一つがボランティア活動なのです。そして活発的な友情によって、オリーブジャパンの活動もますます活発的になっていくと考え、願っていました。

それ以外にも、オリーブジャパンが実際に活動できる場が必要であると感じていました。新しい文化講座として料理講座を企画しましたが、その場所探しにとても苦労しました。いろいろな所をあたりましたが、資金や器材の点で問題があり、自由に使える場所がほしいと強く思いました。また、チャリティーディナーを今後も定期的に行っていくためにも、FOLONのような場所が必要だったのです。これらのことがきっかけとなり、FOLONが誕生しました。

◇FOLONを実際に開いて、その目的を達することができましたか？またFOLONの営業によって生まれたものはありますか？

はい。一番の目的であった、友情の場（ミーティングポイントとして大切な場所）になりました。今では友だちに会いたいと思ったとき、FOLONに来れば必ず誰か友だちに会うことができます。日常生活の中で感じた喜びや辛かったことを、友だちに会って分かち合ったり、友情を深めることができます。ですから、特に若者たちは「FOLONは私たちの場」という意識を持ってくれているのではないでしょうか。

またイタリア料理講座も大変好評です。参加してくださっている人は、料理を勉強しながら恵まれない若者たちを支援することができるので、同じお金を払うことによって二つの喜びがあると思います。そしてチャリティディナーも定期的に企画することができるようになりました。7月と12月にはカンツォーネコンサート&ディナーを行い、大変好評をいただきました。当日は、歌手の水野喜久さんが私達の活動を支援して歌ってくださいました。

また最初の目的以外にも、うれしい出会いがありました。一般のお客さまにオリーブジャパンの活動を知っていただけるチャンスが生まれました。ある方は協力会員になってバザーの時など一緒に働いてくださるようになりました。これは協力者がひとり増えたということだけで

フォロンの前で。柴田さん（写真左）とスタッフの川野さん。

はなく、ひとつ友情が生まれたという喜びでもあります。他にもエルサルヴァドルやメキシコの民芸品などを販売し、わずかながら収益金が生まれるようになりました。お客さまに小物を売ることによって、オリーブジャパンの活動を紹介することができます。

このように、たくさんの方々の支えと友情によって、オリーブジャパンが活動しています。このＦＯＬＯＮはその小さな一部分です。

◇今後ＦＯＬＯＮをどのようにしていきたいですか？

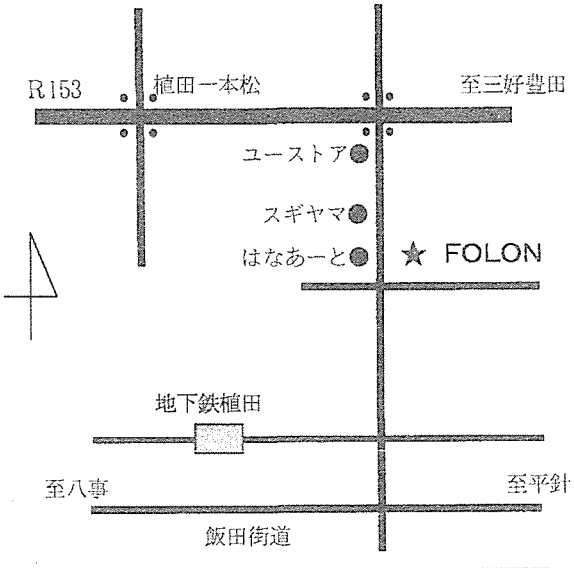
この友情を深める場所として、またオリーブジャパンをＰＲする発信地のひとつでありたいと願っています。

Caffè Italiano ＦＯＬＯＮ

名古屋市天白区植田本町一丁目６０８番地

☎０５２－８０４－７８５８

営 業：10:00～18:00（日曜定休日）



講座紹介

ここでは、オリーブジャパンの語学講座に参加してくださっている方の声を、紹介したいと思います。

イタリア語を受講して

安達(あだち)　勉(つとむ)

イタリア語学習を楽しんでいます。1996 年の 11 月にイタリア語講座の体験受講で先生の流暢なリズムを美しく感じ、受講する事に決めました。1997 年 8 月のイタリアスタディーツアーにも参加し、現地のイタリア人と少しでしたが会話が出来た事が、とても嬉しかったです。イタリア人の友だちから届く手紙を今ではとても楽しみにしています。

講座の授業は、文法や会話だけでなく、イタリア人の生活習慣・食べ物・観光地についてなど、あっという間に時間が過ぎてしまいます。早くイタリア語を自分の中で確かなものにしたいです。

スペイン語と私

福岡(ふくおか)　協子(きょうこ)

数年前まで、スペイン語と私をつなぐものは何もありませんでしたが、ペルーの少女の里親になり、いつかペルーに行ってみたいと思うようになりました。少しでも彼女と会話ができたら、さらに心を通わせることができるのではないかと、スペイン語に興味を持ちました。

そんな頃、新聞でオリーブジャパンの初級スペイン語講座を知り、思いきって申し込んで早一年が過ぎようとしています。

なかなか上達しませんが、いつかペルーに行って彼女と会話をするためにも、今のまま努力し続けたいと思います。

スペイン語講座の授業の様子

オリーブジャパン講座案内

講座の収益はすべて中米エルサルヴァドルで行われている貧困に苦しむ子供と若者への教育支援事業への支援金に当てさせていただきます。少人数制で楽しく学べる当協会オリジナルの講座一覧です。詳細はオリーブ事務局までお問い合わせください。

語学講座

ESPAÑOL　初級スペイン語講座

基礎から学べる初級文法＆会話

日　時　毎月第１・３水曜日１９時半～２１時
会　場　藤が丘コミュニティーセンター
月　謝　５，０００円

ITALIANO　中級イタリア語講座

２名のイタリア人講師による実践会話レッスン

日　時　毎月第２・４金曜日１９時～２０時半
会　場　本郷コミュニティーセンター
講　師　Ａｎｇｅｌａ　Ｖｏｌｐｅ
月　謝　６，０００円

ENGLISH　やさしい英会話

聞ける・話せる英会話習得プログラム

日　時　毎月第１・３木曜日１９時～２０時半
会　場　東生涯学習センター
講　師　汲田紀美子
月　謝　６，０００円

文化講座

洋画入門講座

「楽しんで絵をかく」がモットーの教室です。

日　時　毎月第２・３火曜日１９時半～２０時半
会　場　東生涯学習センター
月　謝　４，０００円（画材実費）
講　師　柴田高良

イタリア料理講座

前　期　４・５・６・７・９月
後　期　10・11・１・２・３月
会　場　ＦＯＬＯＮ
講　師　柴田淑美
月　謝　半期トータル　１８，０００円　／　単発　４，０００円
特　記　日時は皆で相談して決めるため変動します。
（祝日の夜多し、１７時頃から３時間程度）

問い合わせ　：　オリーブジャパン国際開発協力協会
☎０５６１－８５－８３３６　（火・金　14時～17時受付）

緊急報告　SOS 中米

1998 年 10 月末、超大型ハリケーン「ミッチ」が中米を直撃し、大きな被害が出ました。オリーブジャパンでも緊急支援を決め、会員のみなさまや一般の方々からのご協力をいただき、10 月から 12 月までに約 300 万円の支援金を、ホンデュラスに送ることができました。ここで被害を受けた国々の状況を、エルサルヴァドルより一時帰国したオリーブジャパン現地スタッフの吉見ひかるの報告を交えてお伝えしたいと思います。

エルサルヴァドルでは、西部と東部の被害が特に大きく、首都サンサルヴァドルから車で2時間ほどの街オリエンテやサンミゲルでは、500 人以上の乳児が孤児となりました。西部の海外沿いでは消滅した村もあります。また、隣接する国からの輸入に頼っていた野菜などの食料が不足し、物価が高騰しています。

被害が一番大きかったホンデュラスでは、国土の 95%が冠水し、死者は行方不明者 1 万 1 千人を含めて約 2 万人といわれています。上水道の回復も遅れているため、水と食糧が不足し、衛生状態も悪く現地の人々は苦しい生活を送っています。また夜間の外出禁止令が出されているほど、治安は悪化しています。

被害を受けてすぐ、オリーブジャパンと協力して被災国を支援しているエルサルヴァドルのカウンタパート FUNDIPRO のスタッフが、衣料、食料、医薬品などを持って現地入りしました。また、オリーブジャパンの吉見ひかるは 12 月 3 日に現地に入り、現地 NGO 団体 AHPOS (Asociaciòn Hondureña Para Obras Sociales) と協力して、緊急支援センターを設置しました。これらの活動には、会員や一般のみなさまから寄せられた支援金を使わせていただいています。このセンターでは約 800 人の被災者が生活を送っています。そこでは最も弱い立場にいる子どもたちを保護するプロジェクトも実施されています。このような厳しい環境の中では暴力や虐待を受ける子どももいます。窃盗など犯罪を犯してしまう子どももいます。センター内では子どもたちに人間として必要な普通の生活を提供し、教育の場を設け、メンタル面のケアも行っています。大人たちにも子どもたちを守り教育する責任を与えることによって、生きる自信を与えています。現地では、衣料・食料・医薬品などまだまだ不足し運営資金も大変苦しい状況です。その他にボランティア不足の問題もあります。

被災直後、日本でもこのニュースは大きく取り上げられていましたが、時間がたつにつれ、報道されることも少なくなっています。しかしホンデュラスなど被害にあった国々が復興するには 20 年以上かかるといわれています。

オリーブジャパンは、イタリアの NGO 団体、AALMA(中南米メキシコ・アジア協会)、ISI と、エルサルヴァドルの FUNDIPRO とともに、長期的にこれらの国々の支援活動を行っていきます。しかし、日本からの物資援助は非常に困難です。そこでオリーブジャパンでは、引き続き資金援助を行います。このプロジェクトにご理解とご協力をお願い申し上げます。またみなさまからの支援金や、会員制度での長期的な支援をおまちしております。

支援金は、下記の郵便振替口座にお振り込みください。また会員制度につきましては、本誌 14 ページをご覧ください。

振込先(郵便振替口座)　オリーブジャパン国際開発協力協会
名古屋北郵便局　00890-1-24582

収　支　報　告

1996年4月～1997年3月　収支決算

単位：円

収　入		支　出	
前年度繰越金	91,362	海外支援事業支援金	2,829,650
		広報活動事業準備費	454,479
会費収入	350,620	印刷費	59,509
寄付金収入	803,144	賃借料	171,300
文化講座収入	961,500	消耗品	91,000
広報事業収入	971,849	備品	783,679
その他	33,020	人件／交通費	1,000,300
助成金収入	3,190,000	通信　郵便／電話	903,095
		資料費（写真）	11,116
		その他	76,380
		次年度繰越金	20,987
合　計	6,401,495	合　計	6,401,495

1997年4月～1998年3月　収支決算

単位：円

収　入		支　出	
前年度繰越金	20,987	海外支援事業支援金	1,891,983
		広報活動事業準備費	245,120
会費収入	220,000	印刷費	10,329
寄付金収入	551,377	賃借料	140,300
文化講座収入	1,364,600	消耗品	165,111
広報事業収入	872,966	備品	65,001
その他	30,207	人件／交通費	875,800
助成金収入	1,371,000	通信　郵便／電話	689,748
		資料費（写真）	40,102
		その他	253,277
		次年度繰越金	54,366
合　計	4,431,137	合　計	4,431,137

会員制度のお知らせ

オリーブの活動内容に賛同していただける個人、団体はこの会員制度によって一年中オリーブジャパンを支えることができます。

A．賛助会員（1ヶ月一口　１０，０００円）
B．正会員　（1ヶ月一口　５，０００円）
C．協力会員（1ヶ月一口　２，０００円）
D．参加会員（1ヶ月一口　１，０００円）
E．同調会員（1ヶ月一口　　５００円）

郵便振替口座番号：００８９０－１－２４５８２
口座名義：オリーブジャパン国際開発協力協会

申し込み方法：郵便局所定の「郵便振込用紙」に必要事項と会員の種類、納入方法（月払い／年一括）を記入の上、会費を納入ください。後日、事務局（TEL 0561-85-8336）より受領の案内をさせていただきます。

＊ 会員期間は振込日より一年、継続希望の方は更新可能です。
＊ 会員のみなさまには、会報「OLIVEPRESS」と講演会、バザーなどのご案内を優先的にさせていただきます。
＊ 臨時寄付も随時受付をしています。

OLIVE PRESS　VOL.2　　定価 350円

発行日　１９９９年２月
編　集　オリーブプレス編集部
発　行　オリーブジャパン国際開発協力協会
〒489-0863　瀬戸市せいれい町８－４